

第5回女性研究者研究業績・人材育成賞（小館香椎子賞） 受賞者紹介

受賞者の言葉

女性研究者をしっかりと！

伊賀健一

小館香椎子賞を頂けることになり、本当に光栄です。この賞を設立された小館さんとは、応用物理学会・微小光学研究会や Microoptics Conference において日頃から親しくお付き合いさせて頂いているので、ことのほか嬉しいのです。

思い返しますと、男女共同参画に比較的強く関わりを持つようになったのは、小館さんから強く次のように言われた時でした。ちょうど筆者が電子情報通信学会の会長であった時のことです。「伊賀先生、通信学会には男女共同参画委員会がないらしいので、是非作って！」。まさに“だめよ、だめだめ”という感じだったのです。小館さんはその頃、後藤俊夫さんらとともに応用物理学会を中心として女性研究者ネットワークを立ち上げる活動を主導されていました。

早速、通信学会の理事会に提案して、男女共同参画委員会を作ることにしました。当初、“うちの学会には女性会員がほとんどいない”と事務局長が言うので調べて貰ったら700人もの女性会員がいることがわかりました。名簿にも男女の記載がなく、正確なデータもない状態でした。その委員長を荒川薫さんにお願ひしました。量子ドットで有名な荒川泰彦さんの奥様で、ちょうど赤ちゃん語の研究をしておられた頃です。会長としては、「快適活動委員会」という名前にしたかったのですが、理事会はまじめな人が多くて上記の名称になってしまいました。この委員会には多くの女性研究者に集まって貰い、活動が始まったのです。

その頃筆者は、日本学術振興会の理事を務めていました。総務部長が久保真季さんで、協力して女性研究者支援のプログラムを考え、日本学術会議の男女共同参画事業とも連携を進めました。後藤俊夫さん監修の学術叢書『どこまで進んだ男女共同参画』にも共著で学振の事業を紹介した章を執筆しています(写真参照)¹⁾。

学振の関連事業の1つがRPDプログラムでした。出産、子育てなどで研究現場から離れている女性研究者が、研究環境へ復帰するのを手助けする意図でした。数に限りはあるものの、お役に立てたのではないかと考えています。選考にあたる審査員の面接では、涙がでるほど女性研究者が大変な思いをされていることもわかりました。

一方、文科省の「女性研究者支援事業プログラム」がJSTに移管されて進んでおり、その選考委員を仰せつかりました。お茶の水女子大、日本女子大など、優れた企画の提案に感心していました。ところが、2007年に東工大学長への転身ということになったため委員を辞し、今度は学長として応募することになったのです。準備のための委員会を作り、大倉一郎、堤田直子、高田十志和、柳田保子、尾形わかほ、野村淳子の皆さんと作戦を立ててヒヤリングに臨み、理工系大学としてなんとか採択して貰いました。女性研究者、女子学生の割合を増やそう、快適に職務や学業ができる“テイラーメイド型の支援”を骨



〈略歴〉

1963年東京工業大学卒業。68年同大学・助手、74年助教授、84年教授。面発光レーザーを中心とする光通信デバイスに関する研究。01年同大学を定年退職、名誉教授。01～07年日本学術振興会理事、07～12年東京工業大学・学長。14年より一橋大学監事。応用物理学会・微小光学研究会代表。応用物理学会業績賞・SSDM賞、紫綬褒章、朝日賞、藤原賞、Franklin Medal/Bower Awardなど受賞。町田フィル・バロック合奏団を主宰、コントラバスも。

格としたものです。事業の推進時・評価時には、林ゆう子、岡村純、三石ちはる、矢野容子、有山智子、平賀（藤本）香織さんらが加わりました。そのプログラムで企画したものの1つに蟻川芳子さんの講演があり、印象深いものでした。蟻川さんは筆者と東工大・大学院の同期生で、その時には日本女子大学の学長でした。評議員や部局長など大学の運営に責任ある立場の人に対する講演で、彼らの意識改革を意図したものでした。その後、構成員の努力により東工大のプログラムは高評価を得たのです。

2013年には環太平洋の物理学会が幕張で開かれ、渡辺美代子さんからの要請でWIPシンポジウムにて講演しました。タイトルは“WIP & WIT (Women in Physics and Technology)”として、物理分野の理工系における状況についてでした²⁾。

2014年の暮れに電気通信大学の女性研究者支援事業のシンポジウムでも基調講演を行う機会があり、今度は“WIT & WIE”でした。その時、“男女共同参画は女性研究者を50%にするのが目的ですか?”という質問を貰いました。これに対してこう答えました。“それは分野によって異なります。理工系の女性研究者を増やそうとしているのは、必ずしも数の問題だけではなく、女性の特質をよりよく活かすためです”。先に紹介した蟻川さんの講演で、“女性は粘り強く、男性が直ぐに諦めそうなことでも辛抱強くやり遂げます”、とのお話が頭に残っていたからでしょう。

筆者が現役教授の時にも、工学系では比較的多くの女子学生や女性研究者が研究室で育ちました。その何人かについては、小館さん監修の『光できらめく理系女性たち』の中に紹介しました³⁾。

ところで、内閣府の統計において、科学技術における女性研究者の割合というのがあります。2012年のデータでは、日本は統計36カ国中13.8%で最下位です。ところが実数は14万人で世界一なのです。一位のラトビアが1万人、米国が10万人ですから、いかに日本に科学技術者が多く、女性研究者も多いかわかります。日本は科学技術で食べているのです。女性の比率を上げるために%の数字をクレームすることが多いようですが、それよりも科学技術者の待遇を良くし、世界一多い女性研究者の環境を良くするのが重要だと思います。

受賞にあたり、東工大、学振、学会において、ともに協力して活動した仲間へ深く感謝申し上げます。また、微小光学研究会の運営委員長である中島啓幾さんには、推薦の労をお取りいただきました。

文献

- 1) 後藤俊夫監修：どこまで進んだ男女共同参画（日本学術会議叢書）（学術協力財団2006）。
- 2) K. Iga: “WIP and WIT”, Proceedings of the 12th Asia Pacific Physics Conference, JPS Conf. Proc. Vol.1, No. 018003 (2014)。
- 3) 小館香椎子監修：光できらめく理系女性たち（オプトロニクス社、2007）。

